

フェルナン・ブローデル 著

『文明の文法』 I・II 巻 (みすず書房、1995~96年)

中川 久嗣

本書『文明の文法』(Grammaire des civilisations)は、現代フランスの有名なアナール学派の歴史家フェルナン・ブローデル(Fernand Braudel)が分担執筆したりセの最終学年向けの教科書から、ブローデル自身が担当した部分だけを抜き出して再編集し、刊行したものである。もともと教科書として書かれたテキストであるから、その内容や文章も一般向けとしてやさしいもので、専門研究者向けの煩雑詳細な議論から解放されて、ブローデル自身が、文明史の大海原の見取り図を自由自在に切り取って描き出している、といった感が強い。文明という用語の起源や定義の問題から始まり、アジアやヨーロッパの諸文明の活動とその歴史が、はるか黎明の時代から激動する現代に到るまで、大局的かつ長期的視点から説き明かされてゆくのである。

ブローデル自身、かつてはリセの歴史教師であったこともあって、一般読者に歴史の動きを語るその語り口は、簡潔かつ要所を押さえた明快なもので、つい細かな学説史などに目を奪われがちな専門的歴史学研究からは見えにくい文明のダイナミックな動きと躍動が、生き生きと読み手に伝わってくる書物となっている。専門的歴史学研究と同じく、微細な受験知識の羅列に終始しがちな現在のわが国の中学や高校の歴史教育にとっても、この『文明の文法』は、まさに歴史教育かくあるべしという一つの新しい可能性の喚起として受け取られてもよいはずである。この本の冒頭に序文をよせているモーリス・エマールによれば、この『文明の文法』のもととなった歴史教科書は「戦闘の書」である。同じように刊行されている歴史の教科書類の中でも、それほどインパクトと過激な衝撃を与えるものなのであった。

本書のタイトルからも端的にうかがえるように、この本は、文明の「文法」を説き明かすものである。外国語の文法書がまさしくそうであるように、文明についての定義から出発し、地球上のそれぞれの文明の基本的な本質や構造、主要な動きと歴史の説明が繰り広げられる。それはまさしく世界史の文法書であり、文明史の「マニュアル」なのである。

ブローデルによれば、「文明」という言葉の定義づけは、ほとんど不可能であるといつてよいほど困難な作業である。もともとこの語は、フランスで啓蒙の世紀に法律の専門用語から転用され、そのうちに「野蛮」に対立する概念として用いられるようになった。すなわち洗練と進歩を表象するようになったのだ。そののちこの語は、より精神的な領域を表す「文化」と区別されるようになり、不幸なことに20世紀のヨーロッパ内部でのナショナリズムの相克を背景に、どちらがより高次に位置するかといった不毛な議論の中に投げ込まれてゆく。しかし同時に歴史・地理的概念としても用いられるようになり、この語は単なる進歩の状況を表す単数的な意味での使用から、世界のさまざまな地域諸文明といったように、複数化されるようになる。そこではある一つの価値を表すというよりは、時間的・空間的に限定された純然たる歴史

体として用いられているわけだ。20世紀の歴史が進行してゆくなかで、単数形の「文明」は、「その光輝を失ってしまった。それはもはや、18世紀が認めていたような、高い、いとも高き、精神的・知的価値などではなくなった」（Ⅰ-36頁）のである。単数形の文明が用いられるとしても、それは諸文明に共有されるようになった共有財産、すなわち「火、文字、計算法、植物栽培・家畜飼育」（Ⅰ-36頁）あるいはビルや飛行場や鉄道や巨大都市といった「工業技術」を指すに過ぎない。いまや巨大な「工業文明」が世界を画一化してゆくであろう。しかしブローデルは、そのような一面での画一化にもかかわらず、諸文明の複数性と多様な差異がこれからも存続し続けるであろうと断言するのである。

さらにブローデルによれば、「文明」とはまず何よりも、空間、しかもいくつかの文化的特徴の結合が支配的な、一つの空間、である。しかもそのような文明は社会によって活力を与えられる。あるいはしばしば文明と社会は同じものと考えられる。したがって社会学者のアプローチの方法は、文明研究にしばしば有益な成果をもたらすものである。また文明は経済であるとも言われる。経済的諸変動は、文明のあり方に直接的な影響を与える。例えばハンチントンの「文明の衝突」（ブローデルは、現実には歴史上諸文明相互の関係が多くの場合暴力的関係にあったことを指摘している）などを考える場合も、実際のその衝突は、現代社会では、経済的衝突という様相をとる傾向にある。またブローデルによれば、文明と文化の差異をたてるとするならば、その最も顕著な例が、都市というものの存在の有無であるという。西洋の歴史を文明史の観点から見れば、都市による農村および農村文化の奪取という一貫した動きが見られることになるであろう。

社会の最小構成単位はもちろん人間であり、人間事象と文明事象は切っても切れない関係にある。人間の存在しない文明は考えることができない。文明とは人間の集合体である。したがって、そこから文明を「集合心性」というアナル学派に特徴的なタームで把握してゆこうとする姿勢も生まれてくる。人間の集合心性は、しばしば諸文明の特質や傾向を長期的に規定してきた（文明のこの長期的な連続性という観点もアナル派によく見られるものだ）。「一社会の態度を決し、選択を方向づけ、偏見を根づかせ、動きに影響を与えるこうした心性は、すぐれて文明の一事象なのである」（Ⅰ-51頁）。しかもこのような人間の心性、すなわち文明の「基本的価値、心的構造は、確かに諸文明が相互に最も伝達しあえない部分であり、それぞれを最も大きく切り離し区別するものである」（Ⅰ-52頁）。その変化はきわめて長期的で緩慢なものである。また当事者である人間たちにはしばしば意識されることがない。人間の心性に関しては、宗教の持つ重要性が最も大きなものの一つであると言えよう。例えばキリスト教は、ヨーロッパ文明の歴史の中で「一貫して文明の中心にありつづけてきた」（Ⅱ-32頁）のである。

ブローデルの『文明の文法』に特徴的なのは、以上のような文明の一般的な基本理論（あらゆる諸文明に共通する基本構造）を打ち出すと共に、それと同時に、諸文明それぞれの具体的な歴史、特殊性、個性を重視してゆこうとする姿勢である。そこには文明の共通法則のようなものを打ち立てて、すべての歴史事象をそれに従わしめることによって全体的叙述を作り上げていこうとする態度は見られない。文明の歴史というと、ともすると法則性重視の大風呂敷な内容になりがちであるが、ブローデルは「こういう歴史が、歴史哲学という一般化、つまり、

歴史の認識や立証よりも歴史の捏造という安易な一般化に陥る可能性がある」(Ⅰ-66頁)と警鐘を鳴らし、シュペングラーやトインビーなどの「あまりに情熱的すぎる」歴史家たちを警戒することの必要性も指摘するのである。

次にこうした視点から、『文明の文法』では、非ヨーロッパ世界としてイスラム文明、アフリカ文明、中国文明、インド文明、そして日本文明など、またヨーロッパ世界として、ヨーロッパ文明、北アメリカやラテン・アメリカの文明、ロシア文明などが、個別に取りあげられ、その歴史と現在の文明の構造が語られる。

例えば日本文明について。まずもって日本は多種多様な借用によってきわめて独特な文明を築いてきたと述べられる。さらに天皇制秩序の弱体化、将軍体制の出現と戦士(武士)階級の支配、そして明治以降の工業化を経て今日の対アメリカ関係にいたるまで、他文明とのかかわり、経済や都市／農村関係、そして心性や宗教といった、先に見てきたような文明の基本概念にそって語られてゆく。そうした大きな歴史の話の中に、原始アイヌ人、平安期の宮廷文化、清少納言、武士の衣装、歌舞伎、神風、大名の暮らし、禅、武士道などなど、といった話が挿入されてゆく(ところで、叙述の中にはやはり案の定とでも言うべきか、「ハラキリ」や「ゲイシャ」の話が登場する。これはこの書物がもともとはリセの歴史教科書のためのものであったからか、専門家ではない一般の読者向けのテキストであるからか、あるいは西洋人の相変わらずの一種の「オリエンタリズム」からブローデル自身もやはりまったく自由ではないということなのであろうか)。

最後に、単数形の文明の再出現について一言述べておこう。ブローデルは現代文明というものを歴史的な諸文明間の差異を越えたところに出現した共通の要素と捉え、これを単数形の文明としていた。現代の工業文明などがそれにあたるものであった。また例えばコンピューターなども、その典型的な一例と言えるであろう。諸文明の差異や個々の画定された諸領域を越えて、コンピューターとそれに関連する諸技術は、今や人類全体がそれを用い、そこからさまざまな利便の恩恵を得る、ひとつの特殊なテクノロジーの世界を作り上げている。電子的ネットワークは国境や文明の境界を越え、世界をひとつの巨大なネットワークシステムの中に統合しつつある。さらには「資本主義」というものもそうした単数形の文明と呼ぶことができるかも知れない。ブローデルは諸文明間に共通するこのような文化的(あるいは技術的その他の)諸要素を「単数形」と呼んでいる。しかしその「単数形」の文明は、複数化される以前のもともとの「単数形」の文明とは意味合いが異なる。もともとの「単数形」の文明とは、人類の進歩の程度、あるいは端的に進歩それ自体を指す概念であった。つまり野蛮の対立概念としての文明なのである。文明は二つの対立項を持つ。一つは未開であり、もう一つは野蛮である。歴史・地理的概念としての文明が未開と対立する言葉であるのに対して、理念としての文明は、野蛮に対立するのである。その意味での文明は、例えば「アウシュヴィッツ」や「南京」に対立する。またそれは核兵器に、環境破壊に、人種差別に、さらには暴力、搾取、抑圧、排除、無知、傲慢、おごり、権力に、対立する。文明の進展と野蛮への転落の危険性がまさしく比例することは、アドルノとホルクハイマーの主張したことであった。しかし文明は、そうした一連の野蛮に対立し、そうした野蛮への転落を回避するべく注意し、配慮し、批判し、修正しよ

うとする思考・姿勢・努力と同義であるし、またももとは同義であったはずである。このような意味での文明の力は、啓蒙期以来、一貫して不変である。現代という激動かつ混迷せる時代を生きるわれわれにこそ、このような意味での「単数形の文明」が、一つの理念としてつねに求め続けられるべきものなのではないであろうか。文明の持つこのような理念の力についての言及は、ブローデルには見られない。むしろ「現代語では、文明という語を人間的卓越性とか優越性といった古い意味で用いるのにある種のためらいが感じられる」（Ⅰ-36頁）と述べている。しかしわれわれがブローデルの『文明の文法』に付け加えるべきは、このような意味での「単数形の文明」への希求であると思われるのである。